

浄

monthly
JŌDO
1997・8

土



1997
8
August

法然上人鑽仰会・発行



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

浄土

1997/8月号 目次

カラーグラビア寺院紀行	写真=タカオカ邦彦	3
月	三橋國民	8
連続小説 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	20
表紙は語る 灯台 闇を照らす光	岡 克己	29
寺院紀行 群馬県館林 善導寺	真山 剛	30
若和尚のちょっといい話		39
御法語に聴く		40
うまい野菜と料理の話	我田 大	46
日常仏教語		53
Jフォーラム		59
事務局便り		69
編集後記		70

月

三橋國民

これは、生来病弱だったためか、自分の体力の限度みたいなものを知り、セーブしていたことが幸いしていたようである（ただし戦闘だけは違っていた）。

そして悪条件の重なる飢餓の日々が続いていた。とうとう私も風土病と恐れられていた「脚気」に捕捉ほそくされてしまったのである。

幾日かが経つと妙に足がだるく、重くなってきた。小さな棒切れが落ちていても、それを跨ぐことさえ出来ないのだ。これが悪性脚気の前触れだった。

脚気は、死に至るコースがパターン化されていて、先ず腎臓をやられ全身が二倍にも浮腫くらんでしまう「南方浮腫」という型と、もう一つは心臓を直撃されて短時間で生き血を断たれてしまう二通りがあった。

山本のギョロメが私の顔のすぐ真上にあつた。そう言いながら彼はいっぱしの手つきで、取り出したアンプルから注射器に液を入れ、針を上向きにすると気泡を抜いていた。針の先端からこぼれ落ちる小さな水滴が、小屋の中へ斜めに差しこんでいるオレンジ色の夕日を受けて、キラキラ光っているのを私は見つめていた。なぜかその時、あれほど苦しかった心臓も楽になっていたのだ。それと視力が落ちていたのだろうか、針先に弾ける光球が拡大され、幻影の世界が私の眼球の奥に描きだされていた。

と、耳元で思いもかけなかった母のささやきが聞こえた。

「くにたみ！ 何をぼんやりしているんだい。そんなものを注射されると、お前殺されてしまうよ！」

さつき、「楽にしてやるからな」と、行っていた山本の声と、母

間も経たないうちにコロリなんだよ。これは、考えようによつては、楽にしてやれる『お助け薬』つていうことになると思うんだ」

そんなことを得意げに言っていた山本の顔が、私の頭上に被さっている。

「しまった！ この注射液は、山本が人の息の根を簡単に止められるといっていたビタカ
ンなんだ！」

私は反射的に、右手に掲げている山本の注射器を払いのけた。

「何をするんだよ！」

そんな声だけが聞こえた。

このとき、注射器は外の草むらに吹っ飛んだそうである。

るのも不思議だった。

体の全てが鉛を溶かし混まれたような感じで、ひどく重い。私は右足の親指の先のところを動かそうと試みた。ところが、そんな単純な意思さえも通じないのだ。

いつ頃読んだのか忘れたが、永井荷風の書いた本の中に、

「人間は死にいたるとき、からだ全身が鉛のように重くなって物体化し、脳からの伝達は無視されていく」といった一節のあったことを思い起こしていた。

（永井荷風という作家は凄いなあ。人間の最後のこんな状態まで見透かしているんだから……）

どのくらい時間が経ったのだろうか。私は墨を流したような、そして音のない大きな風洞のなかを落下していた。どうした訳か、随分長い時間が過ぎて

るようだぞ？」

「くにたみ！ 負けるんじゃないよ。かあちゃんの名前はカツ。だからおまえはまけちゃあダメ……。分かったかい！」それは私が幼いころ、よく聞かされた母の口癖だった。

「かあちゃん……」

私は幼児言葉で母を求め、両の手を伸ばして母の頬を触ろうとした。だが、どうしてなのか、手が届かないのだ。

「かあちゃん！」

暗くて、髪の毛などはよく見えなかった。そのせいか、真っ白なマスクだけが空間にポツと浮き上がり、私を見つめてほほ笑んでいる。更にもう一度手を伸ばした。

瓜ざね型のマスクは、す

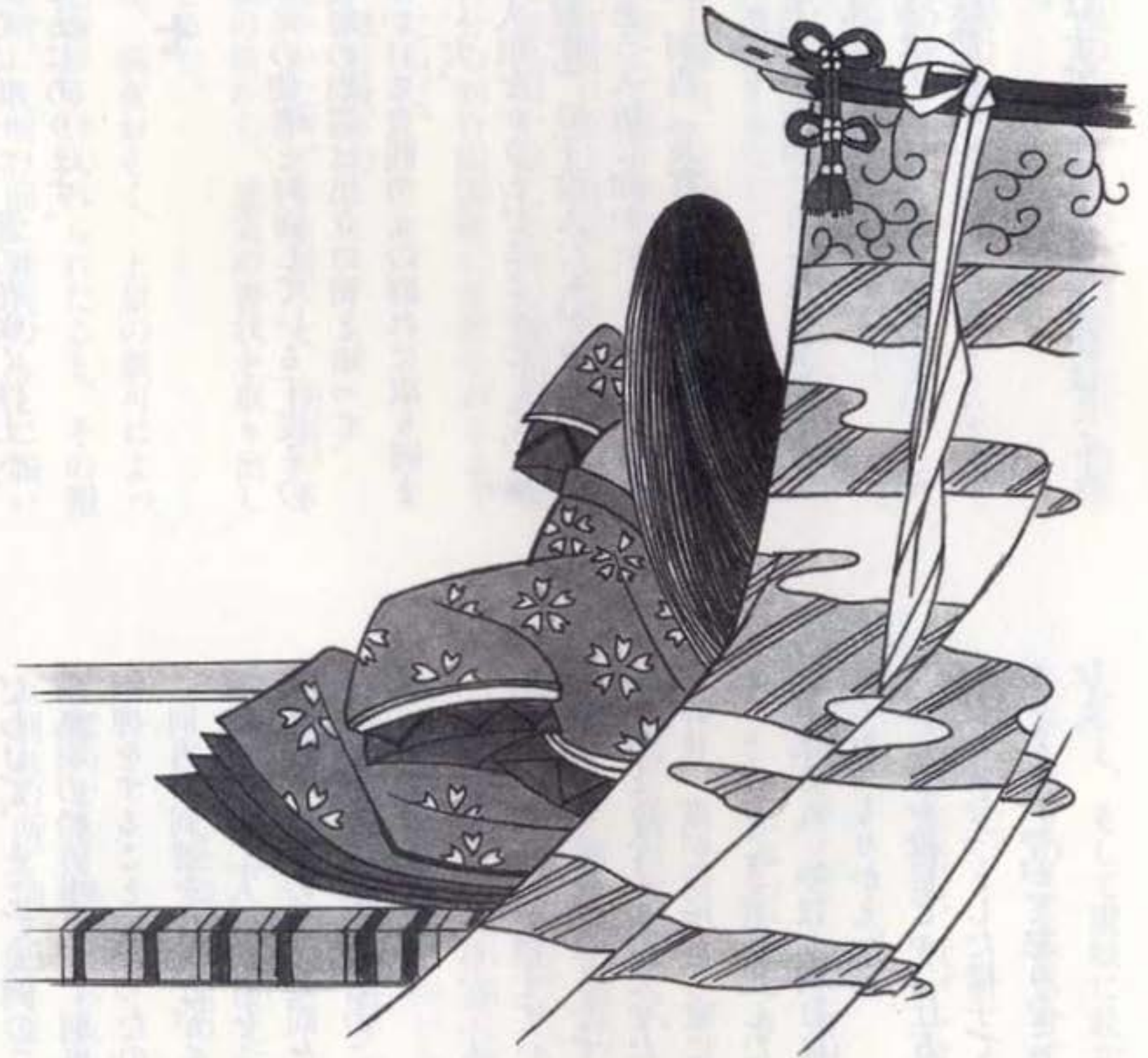
偶然というには出来過ぎていた。

故郷の母が天空に浮かぶ月を介して、死の淵を彷徨していた私を救ってくれたとしか、考えられない出来事であった。

私が奇跡的に蘇った朝、点呼に出ていった私の姿を見て仰天し、ギョロ目を更にギョロつかせていた代用衛生兵の山本——。そんな山本が、二か月後、私と全く同じ症状で倒れてしまった。山本自身は適切な治療を受けることもなく、あっけないほどの最後だった。どんな形でも、私に関わりのあったものが死ぬのは寂しい思いがした。

このことがあって一年六か月が過ぎた敗戦の翌年、私は漸く家に辿り着いた。

その夜、枕を並べた母に戦場での奇跡を一気に話した。





平成二年十一月の落慶式での石井大宣住職



庭園に立つ石井侯雄副住職

時代を担う副住職に何を望むかを聞いてみた。

「檀信徒の教化に意を尽くし、境内建物については早め早

時代を担う副住職に何を望むかを聞いてみた。

「檀信徒の教化に意を尽くし、境内建物については早め早めに補修すること」

再建と一緒に支えてくれた檀信徒、そして伽藍の大切さを身にしみて感じている住職ならではの一言である。

(ルポライター)



平成二年十一月の落慶式での石井大宣住職



御法語に聴く

弥陀の本願を決定成就して、極樂世界を莊嚴したてて、御目を見まわして、わが名をとなうる人やあると御覧じ、御耳をかたぶけて、わが名を称する者やあると、夜昼きこしめさるるなり。されば一称も一念も阿弥陀仏に知られまいらせずという事なし。

『不惑人訓』

阿弥陀さまは、そのご本願のお誓いを成就し、極楽世界をつくりあげられました。そして、その御目を見まわしては、わが名を称える者はいないだろうかとお覧になり、御耳をかたむけては、わが名を呼ぶ者はいないだろうか、昼も夜も問わず、いつもお聞きになられているのです。ですから、たとえわずかの声のお念仏であっても、阿弥陀さまがお気づきになられないことなどはありません。

弥陀はいつまでも

「あのう、ちよつとおうかがいしたいことが……。うちの菩提寺のご住職から、今年のお盆のお棚経は八月十三日に行きますと連絡がありました……。このあたりでは、十三日の夕方にお墓に行つて、迎え火を焚くんですけど、十三日の昼間にお経をあげていただいてもまだご先祖さまをお迎えしていないということにはなりませんか。例年は十四

みんなも納得がいかないというので、今年のお棚経はお断りしようかと話していたんですが、いかがなものでしょう」

つい先日、電話でこんな質問を受けました。声の主はわかりませんが、だいぶお困りのようです。

いろいろお話ししたのですが、ありがたいことに、そのご家庭は家中の皆さんがたいへん信心深いご様子。もつとも、こういったご質問をされるくらいですから、それは十分にうかがえますが。

お悩み、ごもつともです。

地方によつては習わしの違いがありますから一概には申し上げられませんが、だいたい十三日の夕刻にお墓や玄関先で迎え火を焚いてご先祖をお迎えし、十六日の夕刻に送り火を焚いてお送りするのが一般的。ということは、やはり十三日の昼間では、まだお迎えしていないのに、精霊棚の前で先祖のご

「極楽にいらっしゃるご先祖方は、どう思っているだろう」と。

ご先祖が極楽からいらっしゃるとされるのは、その時、つまり十三日の夕方という時間がやってきたから、ということだけによるのでしょうか。いいえ、もっと大切な事がありますよね。そう、何よりも、家族が心を向けてお迎えしたからにはかならないのです。

同じことは年回法要などを勤めるときにも言えると思います。

ご親戚や知人の方々に法要に来ていただくには、土曜日や日曜日の方が都合がいい、というのが現実でしょう。では、ご命日がうまい具合に土曜や日曜に重なっているかというと、そうばかりとも言えません。

「せっかくおじいさんの○回忌の法事をするのだから、どうしても命日に営みたい」

本義からすれば、まさにその通り。

「せっかくおじいさんの○回忌の法事をするのだから、命日より

は少し早いが、皆さんが都合をつけやすい日曜日にしよう」

これまた人情として大いに結構。

はて、どちらが正解。

おそらく、両方でしょう。なぜなら、法要を営むということに対しての真摯な姿勢が、双方の考え方にはあるからです。

ご供養するのに、いつならよくて、いつはいけない、なんてことは誰も言えません。

浄土宗では、一番のご供養はお念仏。

法然上人もおっしゃるように、阿弥陀さまは、お念仏を称える私たちの姿を、その声を、いつも見届けよう、聞き取ろうとされているのです。もちろん、阿弥陀さまのお膝元にいらっしゃるご先祖だつて同じでしょう。

例年とちがつて、菩提寺のご住職が今年は十三日にお見えになるというのは、きっと何か、ご事情があつてのことかと思われまふ。

「あなたが、ぜひとも十三日にお迎えし、十四日にご供養したいというそのお気持ちは、もう、極樂のご先祖さまみんなが承知していますよ。大丈夫、ご先祖さまを一日前の十二日にお迎えして、せっかいですから、ぜひお棚経をしていただいて下さい。ご先祖さまだつて、きつとそれを願っているはずですよ。喜んでくれるはずですよ。こう申し上げて、受話器を戻したのでした。」

(小村 正孝)

自家菜園



うまい野菜と

料理の話⑧



あるいは

セ
ッ
ッ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな

愉しみ

我田大



せんま
 かに
 土に
 土の
 花は
 あり

平成九年
暑中御見舞

浄土宗宗務総長

成田有恒

〒154 世田谷区世田谷四―七―九
大吉寺

浄土宗教学局長

袖山榮真

大心寺

井畑定信

北海道浜益郡
浜益村三十五

浄土宗宗議会議員
真福寺住職

中野玄光

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

ちよつとい旅

吉田ゆきる

紅葉谷てふ新緑の谷歩く
野佛に鑿^{のみ}の跡あり遠郭公

五月下旬かねてから行きたいと思っていた
した、世界遺産になりました安芸の宮島に行
つてきました。ホテルで朝早く目覚めた私達
は紅葉谷の方に散策に出ました。夜来の雨が
一層緑を美しく見せました。八十七歳のお婆
さんが一人で茶店を開く準備をしていました。
「海軍兵学校御用達」というやつと読みとれる
程の古い看板がかかっていました。挨拶を交
わし、その謂われなどきいておりましたら、
その店の飼犬が私達の道案内を買って出てく
れたのです。万緑の中、さっさと歩いては、
時々、私達をふりかえり、離れすぎると待つ

